

B-129 子供服の設計に関する基礎研究
—動作による身体寸法の変化について—
京都女大家政 富山 絹江

目的 子供服設計のための基礎的研究として、今回は小学生低学年を対象に身体計測を行ない、成長量や運動量の関係について考察し、衣服のゆとり量について検討した。また子供達が日常着として着用しているTシャツについて、母親を対象にアンケート調査を行ない、子供服の設計に関する問題点を見い出そうとした。

方法 被験者は、京都府下に在住する小学校1～3年の健康な男女児童各5名ずつ計30名である。測定は1978年7月に行ない、静止時姿勢21項目、運動時姿勢9項目である。

運動時の姿勢は、子供の日常動作や遊びを観察し、1)上肢90°前弯、2)上肢180°前弯、3)前屈、4)しゃがむの4動作である。

結果 成長量について：この時期は男女とも成長の盛んな時期で身長は年間7～10cm、胸囲2cm増加し、周径よりも高径の増加が著しい。運動による身体寸法の変化について：著しく伸縮した項目は、肩峰点～W.L後中心点、背丈、W.L～H.L、脇丈、後腋点間幅の5項目である。前屈、しゃがむ動作では、丈方向の伸び量が大きく、肩峰点～W.L後中心点で7～8cm、背丈5～6cm、後W.L～H.Lで3～4cmの伸びが各学年ともに認められた。この方向では後腋点間の伸びが7～9cmあり最大を示した。90°、180°前弯の動作では脇丈、後腋点間の伸びが大きかった。Tシャツについて：アンケート調査の結果、洗濯による素材の収縮に関して、特にTシャツ丈が短くなり子供がいやがるという回答が多かった。以上のことから、丈のゆとり量に問題があり、成長量と共に運動量の要因が大きく関与し、素材によっては洗濯による収縮率を加味したゆとり量の設定が必要であると考えられる。